高齢者自立へ〝垂水研究〟

市民の健康25年超見守り計画

垂水市は本年度から、高齢者が自立した生活を送るための全国モデルとなる支援策を探るため、鹿児島大学医学部心臓血管・高血圧内科学（鹿児島市）や垂水中央病院（垂水市）と共同で事業を始める。責任者として鹿大教授で鹿大病院の大石充副院長（53）を4月30日、市のスーパーバイザーに任命した。事業は少なくとも25年以上続ける計画という。

尾脇雅弥市長（左）から垂水市スーパーバイザーの委嘱状を受け取る鹿児島大学教授で鹿大病院の大石充副院長＝垂水市文化会館

市・鹿大医学部　全国モデル確立探る

市の高齢化率は39・8％（2016年10月現在）で、県内では南大隅、錦江両町に次いで高い。高齢化が進んでいる現状を踏まえ、市からの相談に大石副院長が応えた。事業では、医療や介護費の適正化、医療・介護分野で働く人材の充実などを狙う。

事業を担うのは、口腔（こうくう）ケアや服薬管理、理学療法などに詳しい鹿大の教授らと医・歯学部の学生、市職員計60人程度でつくるチーム。栄養分野では、県栄養士会が協力する。

チームは市内在住の65歳以上の高齢者約6千人を中心に健康チェックを実施して、体の状態や栄養摂取の状況を調べる。本年度は10月以降、約1週間かけて千人程度をチェックするほか、市民を対象にした運動講座などを開く予定だ。

市文化会館で4月30日あった委嘱式には、関係者ら約70人が出席した。尾脇雅弥市長は「市民が垂水に住んで良かったと思え、モデルにもなるようなまちづくりを進めたい」とあいさつ。大石副院長は「医療や行政の関係者、市民が共通認識を持って健康を考えていきたい。〝垂水研究〟を立ち上げ、高齢者を全ての面でフォローしていく」と抱負を語った。（福盛三南美）